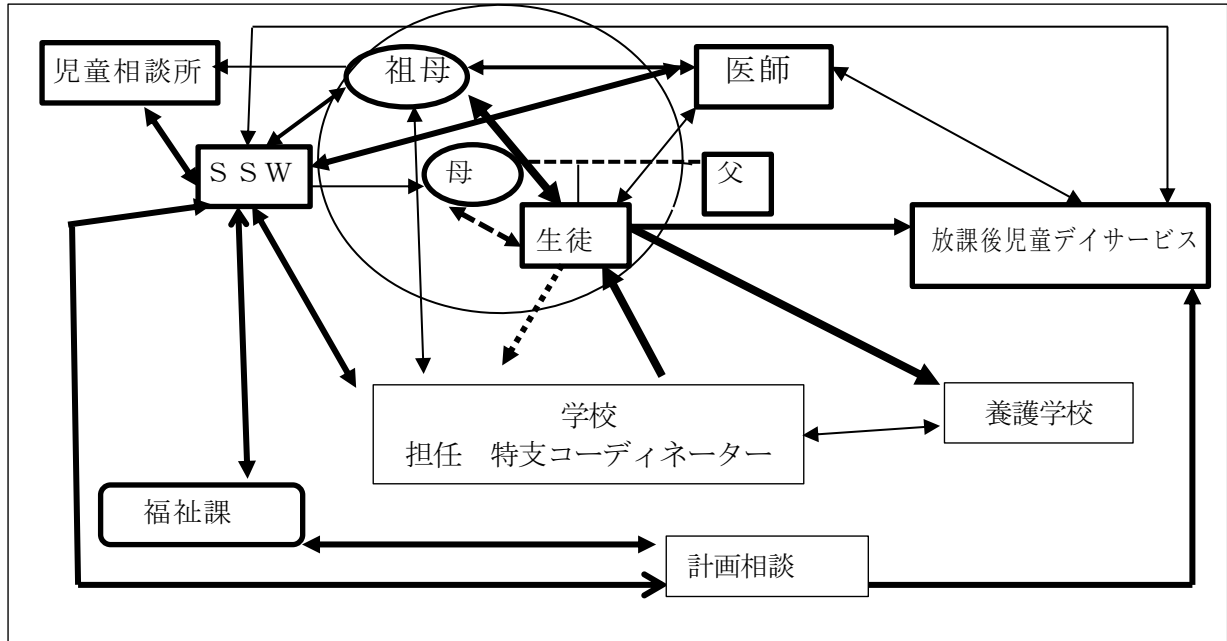


重い自閉症によりひきこもりになった生徒を 学校と福祉関係者で支え、登校につなげたケース



1 気になる状況

- 当該生徒は、中学校に進学してから極端に集団生活を嫌がるとともに、教師や友達が近寄ることに拒否感や不快感を示すようになった。また、気分が悪いことを理由に1校時を終えてから早退する回数が増加した。
- 当該生徒は、学校生活に苦痛を感じるようになり、5月から学校を欠席するようになった。
- 家庭では、自分の部屋にひきこもり、自室前の廊下で食事をするなど、家族に対しても自分を閉ざすようになった。
- 学校は、主に当該生徒を養育している祖母から、当該生徒の将来に対する不安について相談を受けた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 当該生徒は幼児期に重度の自閉症スペクトラムと診断を受けている。
- 障がいの特性から、社会的及び情緒的コミュニケーションの統合が苦手であるとともに、一旦否定すると頑なに拒否し、考えを修正することができない。
- 当該生徒の聴覚過敏及び過度な警戒心は、思春期を迎えてからはその傾向が一層強まっており、学校の集団生活を恐怖に感じている。
- 当該生徒は、強い偏食や極端な運動嫌いの傾向があり、糖尿病を患っていることが判明した。
- 当該生徒の父親は、母親や当該生徒への暴言・暴力などの問題を起こしており、児童相談所や警察が関わったことがある。
- 当該生徒は、学校からの登校刺激を大きなストレスに感じており、養護学校に進学することを望んでいる。
- 当該生徒の母親は、精神疾患やてんかんを患っているため、当該生徒の祖母が当該生徒の養育を行っている。

(2) 学校との情報共有の状況

- SSWによる学校訪問の際に、特別支援コーディネーターから当該生徒の自閉症の特性理解や対応について相談があった。

- S S Wが、当該生徒の医療受診歴及び幼児期に関わっていた保健センター、児童相談所、市の子育て関連機関から情報を収集し、必要な情報について学校と共有した。
- 当該生徒の支援に協力が可能な福祉機関情報を学校及び家庭に情報提供した。
- 学校から、当該生徒の学校生活での変化や問題点、家庭訪問時の状況等を情報提供してもらい、当該生徒の支援プランの構築を図った。

3 ケース会議の状況

- 5回のケース会議を開催した。
- 参加者は、学校（管理職、学級担任、特別支援コーディネーター）、医師、市の福祉課計画相談担当者、放課後児童デイサービス事業所、当該生徒の祖母及び母親、S S Wである。
- 主な内容は、①支援目的の明確化と焦点化、②情報共有、③支援プロセスの共有、④困難な課題の共有と対策について協議した。

4 プランニング

- 自閉症の特性から学校生活を苦痛と感じている当該生徒にとって、現段階では教師からの登校刺激は逆効果であることを関係者間で共有理解を図った。
- 当該生徒は、進学を希望しており、病気から自分の命を守りたいという強い意志に注目した。
- 当該生徒の引きこもりを未然に防ぐために、放課後児童デイサービスなど学校外での居場所づくりのために、福祉機関と家庭とをつないだ。
- 運動を通して体調管理を行うとともに、人と関わることの安心感や自信を養うことを重点とし、今後の目標を、①進学希望の実現、②引きこもりの未然防止、③体調管理とした。
- 役割分担について、学校は、受容的な家庭訪問、進学希望校の情報提供、進学希望先での学校見学を行うこと、医師は、糖尿病治療のための日常生活の指導、S S Wは、支援可能な福祉機関との連携及び放課後児童デイサービス利用に向けた準備を行う。

5 関係機関との連携

- 計画相談作成者と放課後児童デイサービス事業所、当該生徒の祖母及び母親とS S Wで、当該生徒の支援計画について作成を進めた。
- 当該生徒が放課後児童デイサービスを利用できるよう学校と連携を図り、市の福祉課に個別の教育支援計画等を示し、実現に向けた取組を進めた。

S S Wが市の福祉課、関連する福祉関係者、学校、家族、医師をケース会議に招集したことで、家族の困り感や、それぞれの機関の見解や役割、機能について容易に理解でき、実効性のあるプランの構築・実施につながった。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

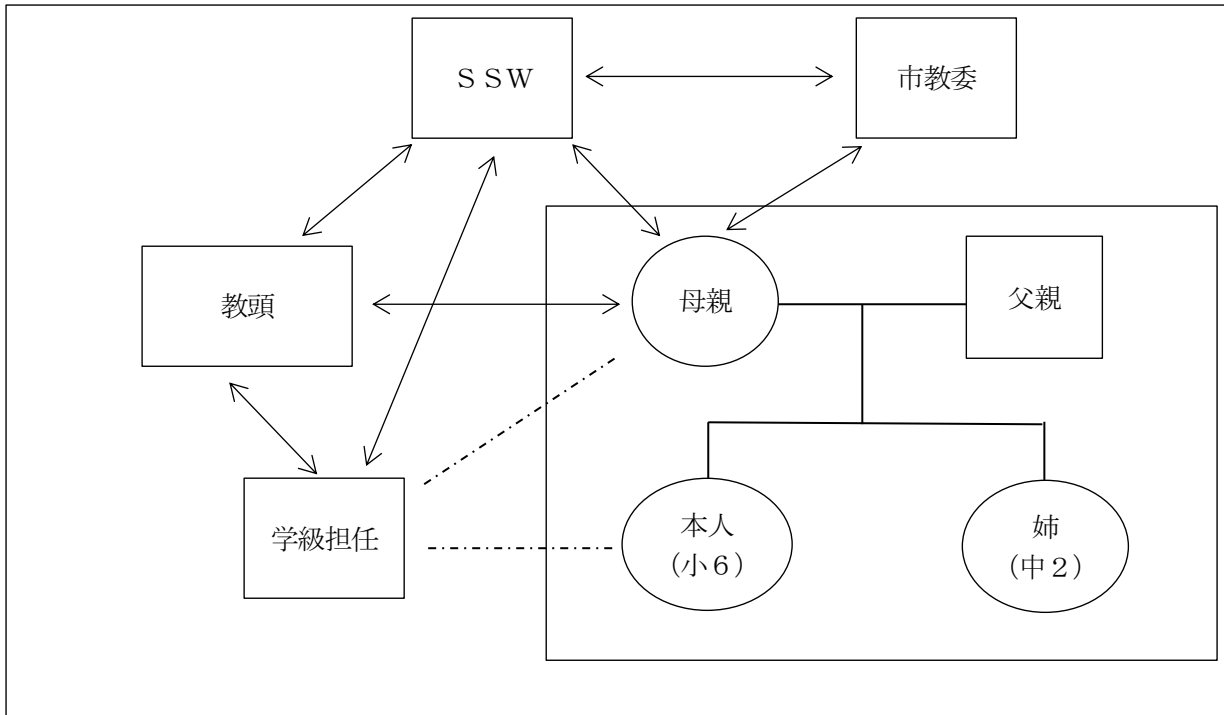
<成果>

- 当該生徒は、糖尿病に対して強い危機感を抱き、放課後児童デイサービス事業所やN P Oが実施する運動プログラムに進んで参加するようになった。
- 短期間で体調の改善を図ることができ、数か月間休んでいた学校にも何度か登校し、高等学校進学についても前向きな姿勢で考えていくことができるようになった。

<課題>

- 集団に対する嫌悪感や学校生活へのストレスは依然として残っている。学級担任や放課後児童デイサービスの支援員への警戒心は弱まっているため、当該生徒にとって負担の少ない学校生活となるよう検討を進めるとともに、当該生徒を交えた支援プラン会議を計画する必要がある。

S SWの関わりにより不登校傾向から立ち直ったケース



1 気になる状況

- 当該児童は、学級担任から指導を受けたことをきっかけに、学校を休むようになった。
- 当該児童は、学級担任からの指導を「当該児童の忘れ物により周りの友達に迷惑をかけている」「当該児童が、転入児童に対して冷たい態度をとっている」と受け取り、精神的に不安定になった。
- 学級担任の厳しい指導により、学校を休むようになったことから、当該児童の母親は、学級担任に対して不信感をもった。
- 当該児童の母親は、教頭に電話で相談するとともに、市教委にも相談を行った。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 家族の状況
 - ・ 当該児童及び当該児童の父親、母親、姉の4人家族である。
 - ・ 当該児童の母親は、学級担任の指導に不満をもっている。
- 当該児童と友達との関わり
 - ・ 当該児童は、他人と上手な関わりをもつことができずに、周りの児童に迷惑をかけることがある。
 - ・ 当該児童は、自分の感情が高ぶった際、自分の思いをうまく説明できない等、感情をコントロールできないことがある。

(2) 学校との情報共有の状況

- 市教委は、当該児童の母親及び学校から聞いた情報をS SWと共有するとともに、S SWを学校に派遣した。
- 学校は、教頭を中心とし、学級担任や他の教員からの情報を取りまとめ、S SWに情報提供した。

3 ケース会議の状況

- 管理職及び学級担任、教育委員会、SSWでケース会議を実施し、SSWや学級担任が継続的に家庭訪問を行った。また、当該児童の様子について情報を共有していくとともに、今後の当該児童の登校に向けた支援や学級担任との関係修復に向けた取組について確認した。

4 プランニング

- 当該児童への支援
 - ・SSWは、当該児童の自尊感情を取り戻すことができるように定期的な家庭訪問による支援に努めた。
 - ・SSWは、当該児童が学校や学級担任とのつながりを保つことができるよう支援に努めた。
- 当該児童の母親への支援
 - ・SSWは、当該児童の母親が当該児童の気持ちにより添いながら、登校に向けた支援ができるよう支援した。
 - ・SSWと当該児童の母親との信頼関係が構築された後、学級担任とのつながりを回復させるよう支援する。
- 学級担任への支援
 - ・当該児童と母親の学級担任に対する不信感を解消するために、教頭と連携して学級担任に対し、当該児童及び母親への適切な対応について助言する。

5 関係機関との連携

- 市教委
 - ・当該児童の保護者からの相談電話の内容について学校に照会し、現状の確認を行うとともに、SSWを学校に派遣した。
 - ・今後の当該児童及び保護者への対応について、学校に対し指導助言を行う。
- SSW
 - ・当該児童及び保護者、学級担任に対して継続して支援を行い、当該児童の不登校傾向の改善、学級担任との関係の改善に向けた取組を進める。
 - ・今後、当該児童及び保護者と学校との間で関係が悪化した場合は、他の関係機関との連携を図る。

SSWが、学校と当該児童及び保護者への支援の方法と役割を明確にしたことで、早期に対応することができた。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

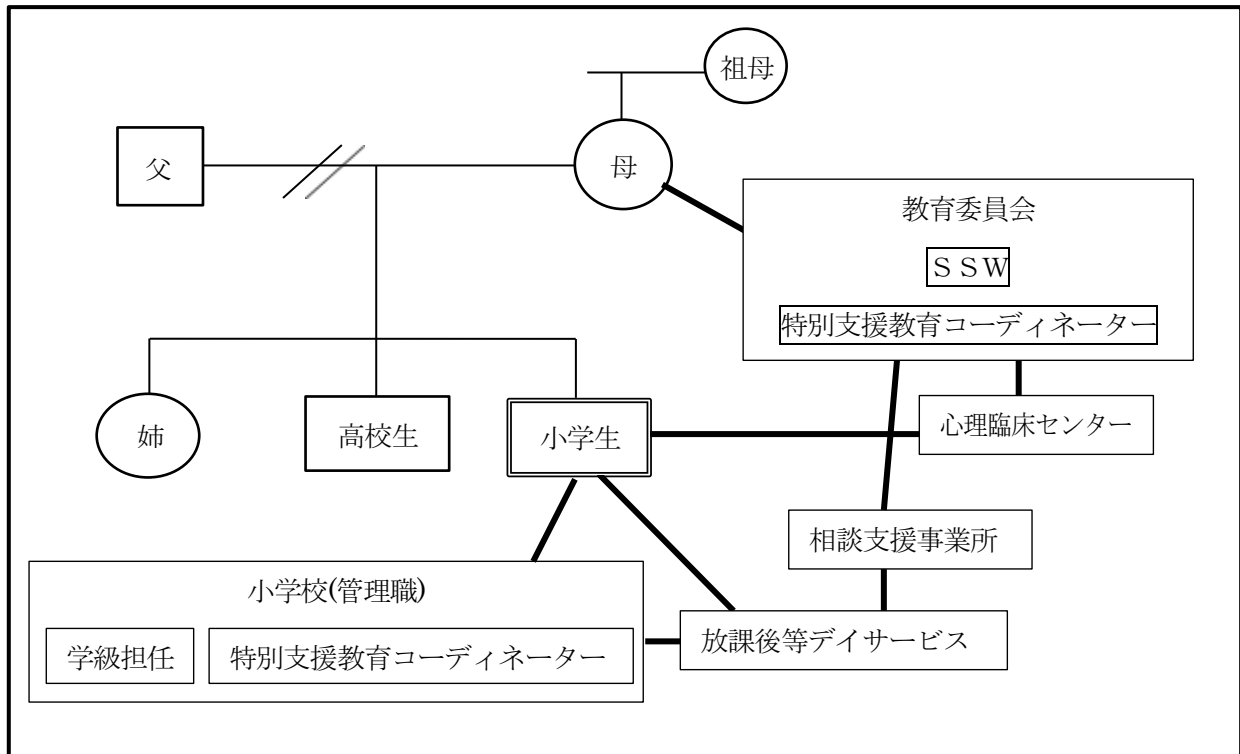
<成果>

- 市教委とSSW、学校の連携した対応により、当該児童が早期に不登校傾向から改善することができた。
- SSWの関わりにより、当該児童及び当該児童の母親と学級担任との信頼関係を回復することができた。

<課題>

- 早期の段階で、当該児童及び保護者が学校に気軽に相談できる環境づくり及び不登校等に向けた校内組織体制の構築、SSWによる関係機関との連携について見直しを図っていく必要がある。

入学後に不登校傾向を示した、母子分離が困難な小学生男児のケース



1 気になる状況

- 当該児童は、小学校入学後の夏季休業前から不登校傾向が見られた。
- 当該児童は、学校から逃げ出そうとして学級担任に止められ、学級担任に抱きかかえられて戻されたことに強い怒りを感じ、その後、意図的に不登校状態が続いている。
- 当該児童は、母親と一緒にいないと登校しない。また、学校では、短時間、別室で過ごしている。
- 当該児童は、家庭で明るく振る舞う反面、「一人ぼっち」「死にたい」等、自分のことを否定的に話している。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 当該児童の家族構成は、会社員の母親、成人の姉、高校生の兄、小学生の当該児童4名である。両親は離婚し、母親が養育している。
- 母親は、当該生徒との関わりを多くもとうとしている。姉は家にいる時間が多く、当該児童と過ごす時間は多い。
- 当該児童と父親は、長期休業中に会う等、関係は良好である。
- 当該児童は、家庭で、のびのびと過ごす反面、大人びた言動があり、発達面の不安定さが見られる。
- 母親は、当該児童に登校してほしいと思いながらも、「自分の意思を示せる、しっかりした子である」という思いがあり、現状についての困り感はあまりなく、当該児童の登校に向けた働きかけは少ない。
- 心理検査の結果、当該児童は不安をもちやすく、自己表現をすることや様々な見方をすることが苦手なことが分かった。また、不安をもってしまうと、周囲の意見を受け入れなくなってしまう傾向があることが分かった。
- 不登校の要因は、当該児童と家族の年齢が離れており、当該児童が自分の気持ちを表現する場面が少なかったことが推察される。

(2) 学校との情報共有の状況

- 母親から毎日欠席の連絡はあるが、放課後登校等は母親の仕事の都合がつかず、当該児童が登校を強く拒否しているため、実施できていない。
- 学校は、当該児童の希望に応じて、別室登校等の体制を整備している。

3 ケース会議の状況

- 【第1回】（5月）・教頭、学級担任、SSWで、当該児童の現状と対応を確認した。
・保護者面談で、保護者と当該児童に関わり、悩みを共有し、当該児童の理解のため、心理検査の実施を提案した。
- 【第2回】（9月）・教頭、学級担任、特別支援コーディネーター、心理臨床センター職員、SSWで当該児童の検査結果を共有するとともに、今後の支援の方向性を話し合った。
- 【第3回】（10月）・保護者、心理臨床センター職員、相談支援事業所職員、放課後等デイサービス職員、SSWで、当該児童の検査結果を共有するとともに、放課後等デイサービスの継続的な利用に向け、支援の在り方を検討した。
- 【第4回】（12月）・教頭、学級担任、相談支援事業所職員、放課後等デイサービス職員、SSWで、当該児童のデイサービス利用状況の報告及び今後の登校に向けた支援の在り方を協議した。

4 プランニング

【当該児童】

- 当該児童が様々な経験を積み重ねることにより、当該児童の発達の不安定さを解消するよう努める。
- 当該児童は、不安をもちやすく、学校への拒否感が強いことから、当該児童が、安心して放課後等デイサービスを利用できるよう努める。

【母親】

- 母親は、当該児童が自分の気持ちを表現できるよう、共感的に受容するとともに、姉や兄に協力を求める。

5 関係機関との連携

- 心理臨床センターでは、当該児童の心理検査及び母親との面談を行う。
- 相談支援事業所では、当該児童の家庭の様子を聞き取り、放課後等デイサービスでの支援目標の検討や関係者との共有を行う。
- 放課後等デイサービスでは、当該児童の人間関係形成能力を高め、発達の不安定さを解消するよう努める。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

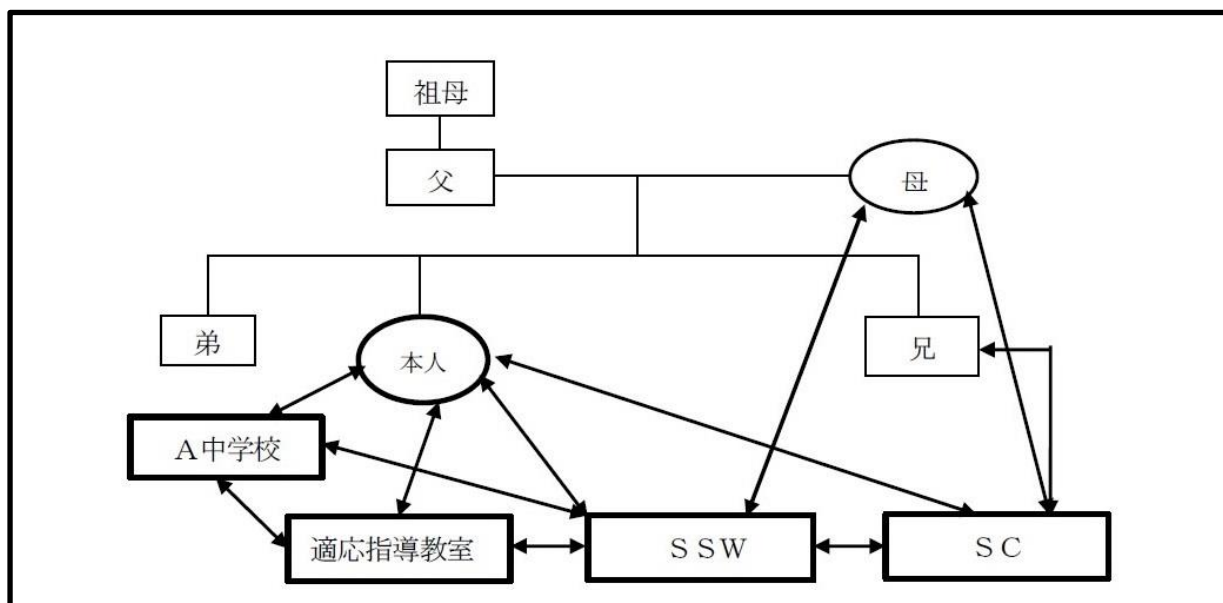
<成果>

- 当該児童の不安感や物事への拒否感が強かったが、放課後等デイサービス職員等が、当該児童に丁寧な関わりを継続したことにより、当該児童は安心感をもち、放課後等デイサービスを継続的に利用するようになった。

<課題>

- 当該児童は、放課後等デイサービスを継続的に利用しているが、学校への登校に向けた意欲が向上していないことから、関係者で、アセスメントやプランニングを見直し、対応する必要がある。
- 当該児童は、放課後等デイサービスのプログラムを受け身で行う姿が見られたことから、当該児童が目標をもち、達成感を高める取組を進める必要がある。

学校・SSW・適応指導教室・SCが連携して不登校を解消したケース



1 気になる状況

- 当該生徒の訴え
保護者とともに面談し、以下の訴えがあった。
 - ・学級や部活動で嫌なことを言われたり、されたりするので学校に行きたくない。
 - ・適応指導教室に通いたい。
 - ・学校に行きたくない気持ちが強く、登校をしたくない。部活動に戻る気持ちもない。
- 出欠の状況
 - ・夏季休業前までは欠席はなかったが、夏季休業明けは2日間だけ登校し、それ以後は欠席した。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 6人家族で、父母と祖母と同居し、兄と弟がいる。
- 当該生徒は、家庭内のトラブルで家を飛び出してしまったことがあることから、保護者は、当該生徒の考えをそのまま受け止める傾向がある。
- 母親は学校復帰を強く望んでいる。
- 当該生徒の学級や部活動内のトラブルは、学級担任及び部活動担当の指導により、改善されている。しかし、当該生徒は、登校を拒否し、適応指導教室を希望している。
- 当該生徒の兄が、幼児時期にSCとの関わりがあったことから、SCのカウンセリングを受けることに抵抗は少ない。
- 当該生徒は、マイペースだが思い込みが激しくこだわりも強い。また、気持ちの浮き沈みも大きい。
- 当該生徒と学級担任は、良好な関係を築いている。

(2) 学校との情報共有の状況

- SSWを窓口として、教頭・学級担任・生徒指導担当者等及び適応指導教室・SCとの情報共有を図る。
- 当該生徒の登校に向けた取組は、SCの助言を受けながら学校と協議した内容を保護者や適応指導教室指導員と共有しながら進める。

3 ケース会議の状況

- ケース会議は実施していないが、SSWが情報収集及び情報提供を行い、学級担任や適応指導教室指導員と連携を図った。

4 プランニング

- 当該生徒は、学校を欠席するようになって日が浅いことから、当該生徒と学級担任や部活動担当が話し合い、早期に学校に復帰できるように環境づくりを行うことを目指す。
- 当該生徒の登校に向け、適切な支援をするため、SCの助言を受け、SSWが学級担任、保護者、適応指導教室指導員との情報の共有を図り、指導の方向性を合わせて取り組む。

【各機関の役割】

- ① 当該生徒の不登校の要因は、心因的なものも考えられることから、SCによるカウンセリングを受けさせる。
- ② カウンセリング前に、SSWとSCが情報を共有し、カウンセリング後に今後の取組を協議する。また、SSWが学級担任・適応指導教室指導員・保護者に情報提供し、今後の方向性について共通理解を図り指導に当たる。
- ③ 適応指導教室の通級を認めるが、関係機関で登校に向けての目標の共通理解を図る。
 - ・学校祭までには登校できるようにする。
 - ・放課後を含め、学校に登校する日を増やす。
 - ・学校の情報を当該生徒に伝える。
 - ・学校と連携し、学習面でのサポートを行う。
- ④ 学校での登校不安要素を取り除くために、学校の情報を伝えるとともに、学級担任による適応指導教室の訪問や面談を行う。
- ⑤ 登校時の対応や教室環境の改善を図る。

5 関係機関との連携

- 当該生徒の登校に向け、SSWが学校訪問し、教頭や学級担任と打合せを行った。SSWを中心として、情報を交流し、今後の方向性を確認した。
- 保護者面談の際の参考とするため、SCに、SSWが学校と共有した情報を提供した。保護者面談後は、SCより可能な範囲で情報提供を受け、今後の方向性について助言をもらい、学校に情報提供した。
- 適応指導教室の指導員には、当該生徒や今後の取組などの情報を伝え、指導に役立ててもらおうようにした。適応指導教室での生徒の様子は、学校に情報提供した。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

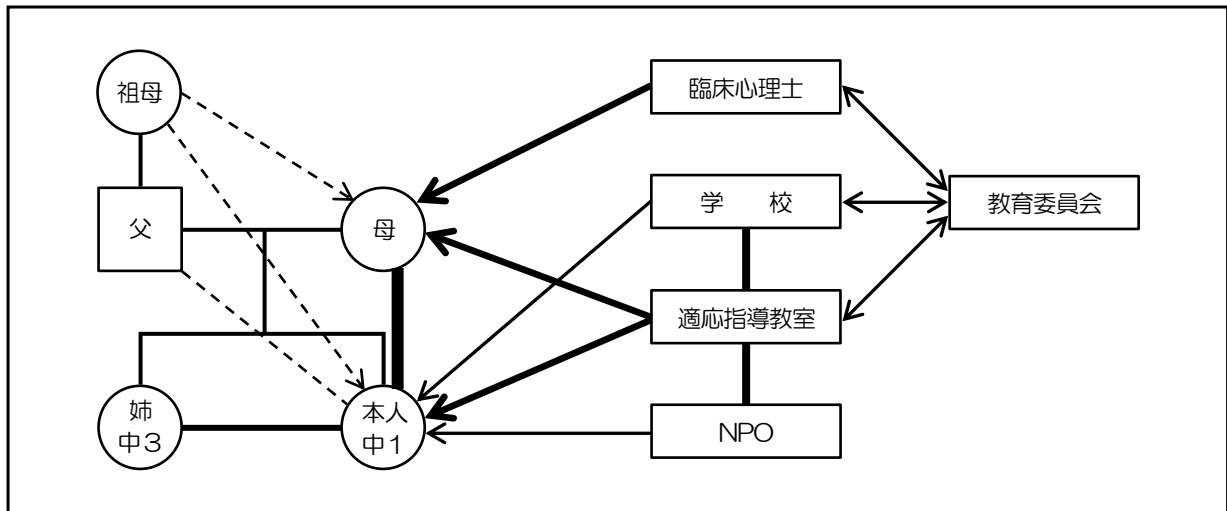
<成果>

- 関係者で情報を共有して、共通理解を図り、指導の方向性を合わせたことにより、学校祭までに復帰するという目標を達成することができた。学校祭以降は、通常どおり登校しており、適応指導教室への通級はない。
- 当該生徒の状況を踏まえ、学校に登校する時期や意義を当該生徒に伝えたことにより、当該生徒の登校に結び付けることができた。

<課題>

- 当該生徒は、情緒的に不安定な面があり、言動も浮き沈みが大きく、対応に苦慮したことから、今後も、当該生徒の状況を継続的に把握する必要がある。

相談員が生徒の心の支えとなって援助する取組をとおして 通級に至ったケース



1 気になる状況

- 当該生徒は、入学後3日間は登校したが、席の近くに話せる友達が少なく孤立感を感じていた。
- 中学校入学後4日目から腹痛や嘔吐の症状があり、その後、登校できなくなった。
- 小学校低学年時も不登校になりかけたことがあったが、母親が無理に登校させ、休まずに小学校を卒業した。
- 朝は決まった時間に起きるようにしているが、家ではパソコンで動画を見て過ごしている。
- 外に出たがらず、部屋にこもっていることが多い。
- 姉が適応指導教室に通級していることから通級を勧めるが、当該生徒は拒否した。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 家族構成は父、母、祖母、姉、当該生徒の5人家族である。姉とは仲がよいが、姉は不登校で、適応指導教室に通級している。
- 祖母は、2人が不登校であることは、母親の子育てに問題があると考えている。
- 父親は病気療養中で無職、母親がパートの仕事をしている。
- 母親は、本人の気持ちを最優先に考えているが、姉と同じように適応指導教室に通級できるようになればと考えている。

(2) 学校との情報共有の状況

- SSWが学校訪問を継続的に行っている。
- 学級担任は、毎週、家庭訪問をしており、本人とも話ができる状態である。
- 小学校からの友達と休日に遊ぶが、登校する様子は見られない。
- 学校では、学級担任がSCや相談員に当該生徒の状況を説明し相談しているが、当該生徒及び母親と今後の方針などに関する面談は実施できていない。
- 今後、臨床心理士と母親との面談も考えていく。

3 ケース会議の状況

- これまで、2回のケース会議を行っている。
 - 【参加者】 中学校校長、教頭、学級担任、SSW
 - 【内容】 ①適応指導教室の考え方と方針の共通理解 ②母と本人の考えの共有 ③適応指導教室へ通級させるための手立て

4 プランニング

- 適応指導教室の指導員が生徒の心の支えとなって援助することを目的として家庭訪問し、心のつながりをもてるようにする。その際、通級を急がせるのではなく、適応指導教室に興味をもてるような働きかけを行う。
- 農園活動や体育等の適応指導教室の行事の見学を通して、通級の楽しさを知らせるようにする。
- 当該生徒が人との交流に興味をもてるよう、NPO主催の行事などの交流の場を活用する。
- 学校は、登校刺激を与えず、週1回の家庭訪問を継続する。
- 当該生徒は、母親への依存が強いので、母親との連携を基盤にしながら支援する。
- 不登校2人を抱える母親のメンタルサポートのために、臨床心理士を活用する。

- 各機関の役割
 - ・ 適応指導教室
 - ア 家庭訪問を継続して行い、姉の協力を得ながら、通級に興味をもつことができるよう働きかける。
 - イ 日常の努力や変化に目を向け、努力したことや成長を当該生徒に伝え、自信をもたせるようにする。
 - ウ 当該生徒は自己表現をするのが苦手なため、ゲームや運動、農園活動などを通して他生徒や様々な人々との交流の場をもてるようにする。
 - ・ 臨床心理士
 - 母親との相談機能を高めることによって、母親の気持ちを安定させるとともに、当該生徒と正面から向き合えるようにする。
 - ・ 中学校
 - 学校の考えについて、SSWを通して、本人・母親に伝えるようにする。
 - ・ NPO
 - NPOが設定する行事への参加を促し、NPOも必ず声をかけるようにする。また、NPOは、適応指導教室の一部活動にも参加し、本人と交流する場をもつようにする。
 - ・ 民生委員
 - 毎週実施する農園活動や行事に参加して、声をかけていく。

5 関係機関との連携

- SSWが当該生徒及び保護者、校長、教頭、学級担任、臨床心理士などの連携を充実するため、定期的な家庭訪問を行い、情報を共有している。
- NPOや民生委員などの適応指導教室への協力者に、当該生徒の状況を伝え、支援を依頼している。
- 臨床心理士と当該生徒や母親の様子について共通理解を図っている。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

<成果>

- 家庭訪問において、ゲームや料理などを一緒につくることにより、指導員とも心が通うようになり、少しずつ適応指導教室に興味をもつようになり通級することができた。
- 通級に慣れてくるに従い、母親が不在でも、通級できるようになり、安心して過ごすようになった。また、学習にも前向きに取り組む姿勢が見られるようになってきた。

<課題>

- 自己表現が苦手で、意思表示がはっきりしない時があることから、段階を踏んで少しずつ表現させるようにしていきたい。
- 主体的に進路の選択や将来設計ができるよう、自分ごととして考える姿勢をもてるようにしていきたい。